

絵画の中のはきもの

“ドラマ” チックな再会

見一 眞理子

唐突ですが、今年の夏に放映されたテレビドラマに出演してしまったのです…と言っても私ではなく、我が家の「木型」がです。

毎回10人の脚本家がそれぞれ個性のおおやじ像を描くシリーズの一話に、主人公としては珍しく靴職人の人間模様を描いたお話、その店内のセットにプラスチック製ではなく木製の木型を使わせて欲しいとのご依頼でした。

ということで、ここ何年開けたことのない物置から取り出した木型はみんな見事に埃まみれでした。しかし、一足ずつ布で丁寧に拭いていくうちに、20足分の木型はそれぞれがまるで「肖像画」のような風情を醸し出していることに驚きました。「〇〇様」と注文された方の名前が書かれているものや、左右のサイズが異なる木型など、単なる塊ではなく人の鼓動が聞こえてくるような生々しい存在感を放っていました。

既にこの時期は秋の二紀展に向けて大きな作品を制作中でしたが、この木型たちとの再会は一瞬に私の心を虜にし、描きかけのキャンバス2枚を一気に塗りつぶしてしまいました。今まで脇役だったこの木型たちをメインに描きたいという気持ちを抑えることができなくなったのです。

「職人」シリーズの後には、新たな表現を模索しながらもなかなかしっくりいく作品が描けず悪戦苦闘が続いています。そんな中、昨年から本誌に掲載させていただく機会を得たことで、自分と「靴」との関わりについて言葉というかたちで向き合うこと

ができました。きっとこの出会いも混沌とした思いが少しずつ解けてきて、もう一度自分の足元を見つめる時間が持てたからかも知れません。

テレビ局の美術スタッフの方に木型をお渡しする際、私の父についてもお伝えしたいと今まで掲載した「かわとはきもの」を参考に添えました。撮影終了後、帰って来た木型たちと共にスタジオのセッティング画像が収められたDVDをいただきました。「映るかどうかわかりませんが、額に見一さんの作品を入れて壁に掛けさせていただきます。」という言葉と共に。放映されたシーンのどこら辺にあったのか…？それでも確かにそこには父が誇らしげに出演していたように感じました。



木型